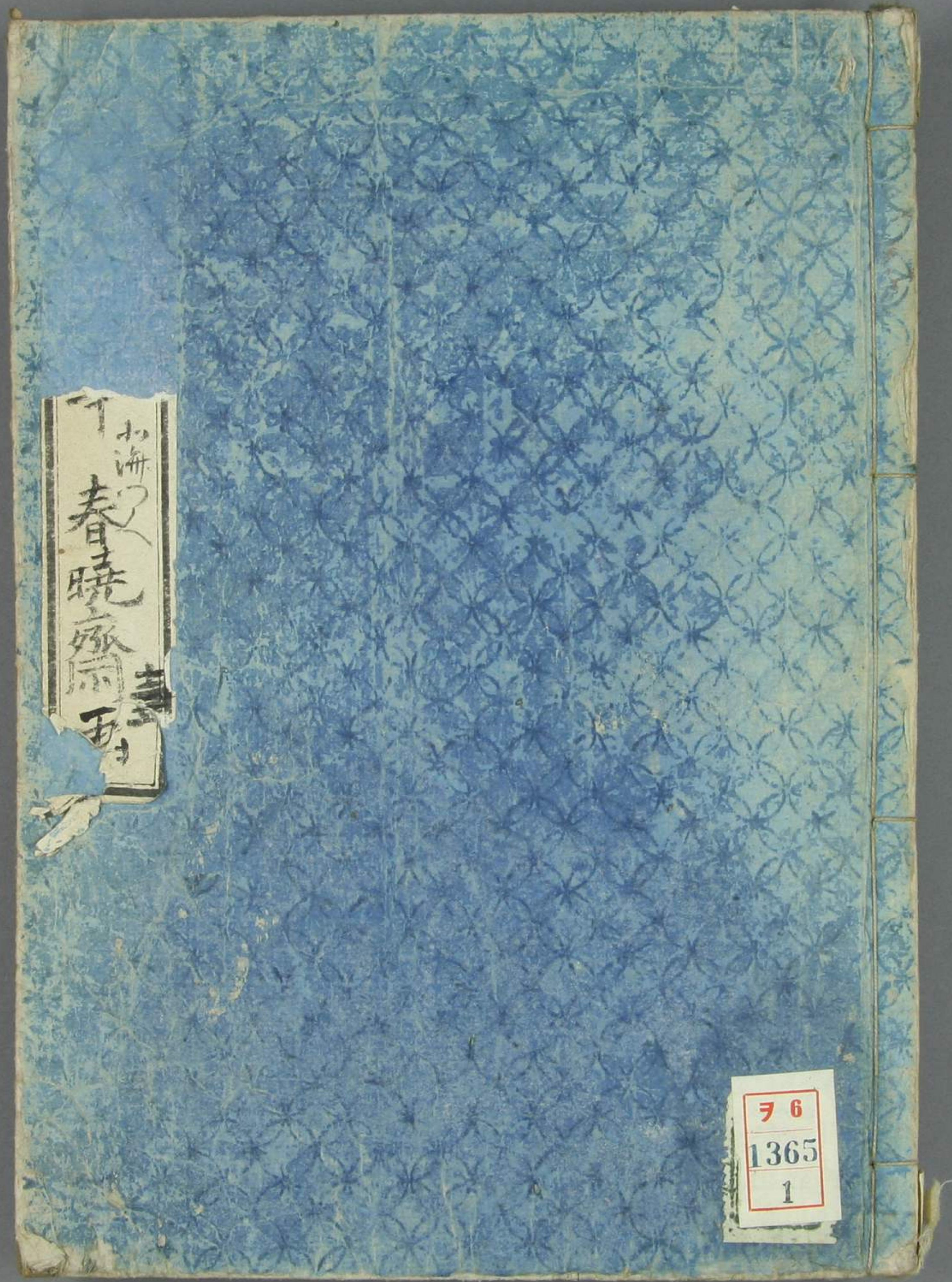




鬼押神夏 仔細

二日 藤森新奉祭 末 任吉新奉祭 大坂 任吉直使 大坂 行基祭 持は

二日 亥

三日 知恩寺百萬遍數珠拜見 末 箕面二富 持は

四日 新奉祭 末 清盛忌 末 天王寺芥田坊法事 大坂

五日 東福寺五大堂火難除神符と出 末

六日 仲長寺國忌 末 小堀遠明忌 末 天王寺古子堂焼二舎 大坂

七日 任吉清唐茶 大坂 新奉祭 伊勢 新能 大坂 二月堂大炬火 大和

八日 推寺修二舎 大坂 原村天王祭 持は 祇園寺八海 末

九日 釈迦堂遺教經 末 貴布祢大教系 末 大通寺遠教經 末 泉涌寺舍利昇帳 末

十日 第六天神祭 江戸 神軍 佐渡

十日 加茂氏人簀應 末 麻苑院天神祭 末 五條天神恩頼祭 末

十日 大原懺法 末 列見 板東

十日 菟原恒若祭 持は 氷上祭 周防 二月堂水取 大和

十一日 所々涅槃會 大雲院 佛光寺新坊 西長法寺 山崎室古冥帳 末 報恩寺舍利昇帳 末

十一日 梅尾四座禪式 末 浪城柱炬 末 天王寺涅槃會 大坂 多田院祭 振津

十一日 兼好法師忌 法玉 堀上寺涅槃會 江戸 虎山祭 豊前

十一日 眞福寺常樂會 大和 麻走 大和 虎山祭 豊前

十六日 積塔 末 御新堂踊躍念佛 末 幸満寺日蓮上人像開帳 末

大雲院貞安上人忌 末

十八日 大悲山觀音會 末

十九日 貝寄風 大坂

廿日 淡間祭 後河

廿一日 光明峯寺殿下忌 末 西本願寺太子會 末

廿二日 加茂松下家後鳥羽院清忌 末 太秦廣濟寺其解斷く太子會 末

天王寺聖靈會 大坂 舍利寺太子會 大坂 法隆寺舍式 大和

廿四日 徳心蓮如上人傳記 系

長福寺月林和尚忌 系

廿五日 兼種清供 系 右経院八幡 板立 麹町天神系 江戸 通昭寺系 河内

宰府天神系 系 雛市 三井

廿八日 千利休忌 系

景物 红梅

彼岸楼

縁楼

桃花

目錄年

行事二目二

諸國 年中行事大成卷之貳

二月之部

故事

上五日 園并韓神祭 今無 古く大内裡の宮内省鎮座あり拾芥

抄云其地大炊御門北櫛笥通西也云々 今社古二説云洛陽醒井通高辻の北小荒神

京師

初卯 八幡系 山城國男山小湊座石清水八幡宮と称し祭神三座

應神天皇 中央 比咩大神 東殿 神功皇后 嚴清和天皇の御宇貞觀元年

八月大和國大安寺の沙門行教豊前國宇佐宮小系松一神託と

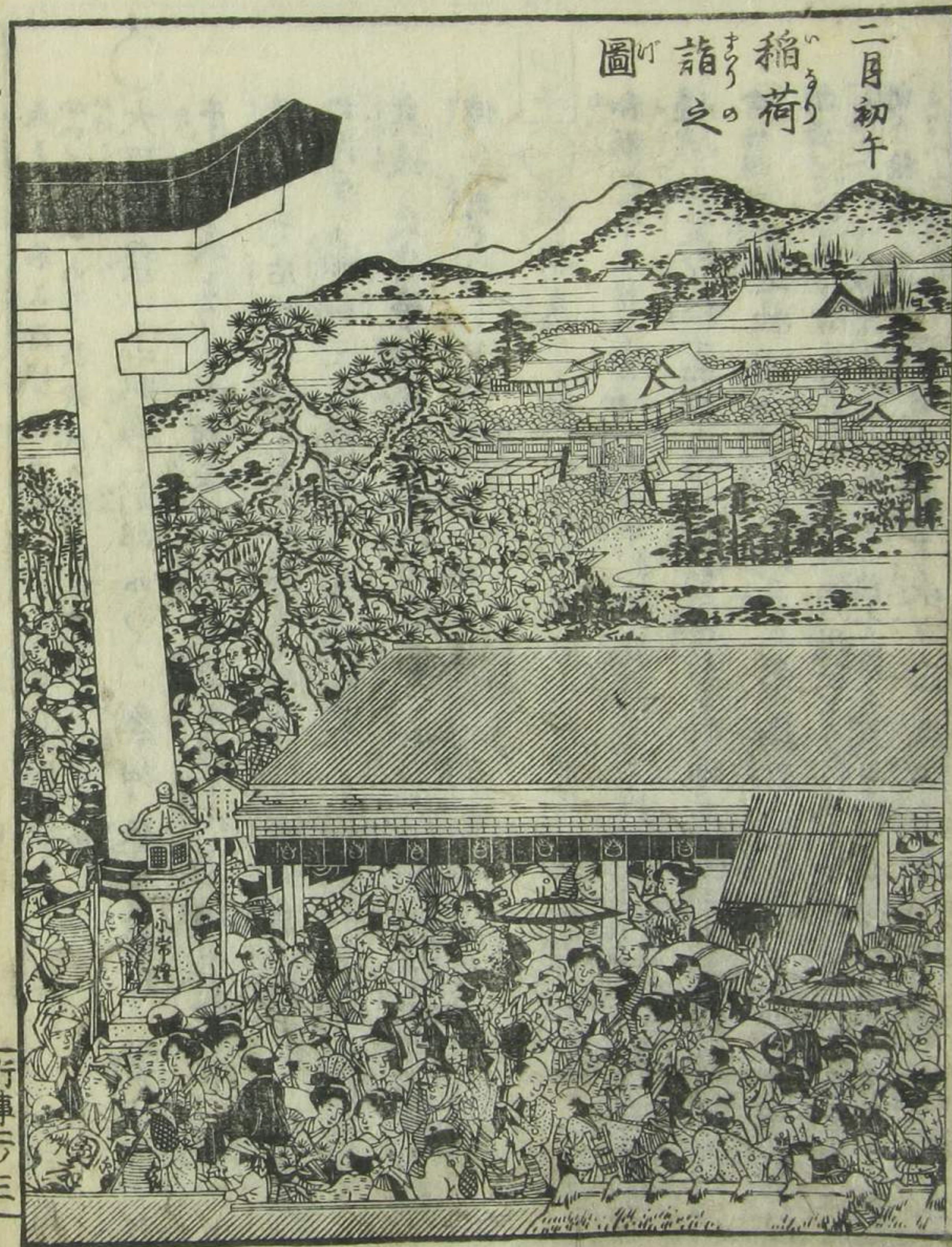
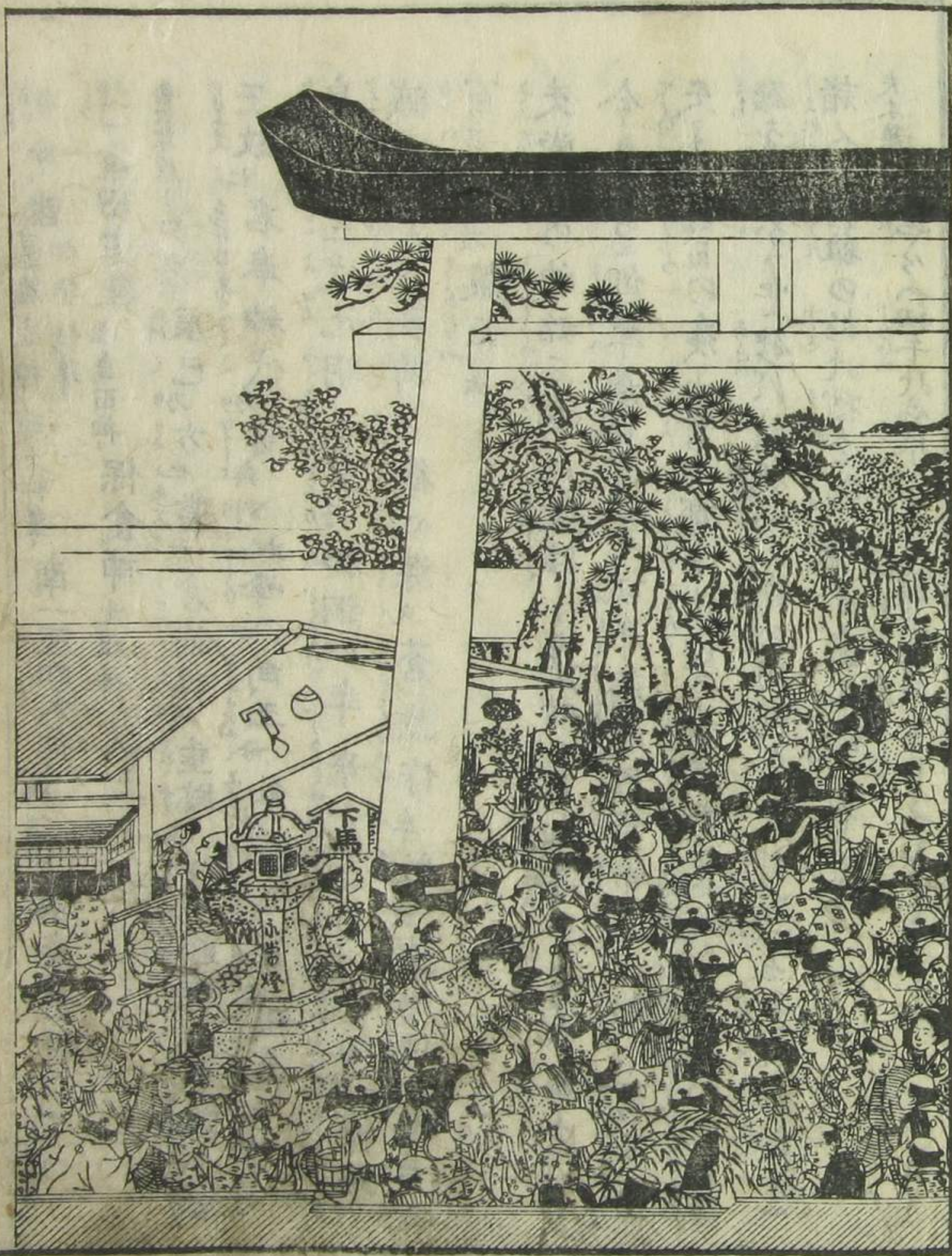
系り奏同を經て男山鳩峯小勅清を 行教を武内宿禰の後胤ありて三箇の

社記云二季初卯の神樂を 尚宮勅節十箇 其原宇佐宮より傳へ系

醍醐天皇延喜十四年教實親王勅して仍てその一より始て堀河院

康和五年十一月上卯行幸の沙汰あり其度所延引ありといふも





所中座 倉稻龜神 瓊々杵尊 南一座四大神 御諸神 推産靈神 大山祇女

北一座田中社 飛鳥田神 保食神 土祖神 以上

豐葦原卜定記云 辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂跡阿利夫此神波百穀於播

王故仁名奉神代昔與利此峰仁向王母知須只三峯仁現王之波人

皇四十三代元明天皇乃和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡

誠仁諸人於哀憐乃御心深久蒼生作年物波草乃片葉未天

百乃災於攘王云々

夫當社の神始三峯に垂跡しつ時二月初午の日ふふふ

今ふ至る例年は日と取く初午詣亦巳午市とも称し本日早

天より齒日の夜小暨び都下近國の貴賤群衆踰々同く人客易

路を遮ふこと往々其驅ひ三都の肉是をとり古く是日系詣る

諸人神難の杉枝枝を折帰る家々納しや

夫本集 二月やう初午此をとりとく稲荷の杉よりふふふ

先後

行事二に

江戸

鳥獸の折て今と後よりは鳥のあふ小玉細工の狐鈴武を布袋

鳥獸の折て今と後よりは鳥のあふ小玉細工の狐鈴武を布袋

奉る平將門謀伐の時立形ふふふ此所ふ動搖せしや

愚岡稲荷系 上野ふあり 太田道灌勸信を

王子三圍 其形ふく稲荷社小詣と

真田山 杉山其形所く稲荷系 道筋 市城の近邊別して後

今日三都及び諸國ふある所の稲荷社へ諸人夥く詣る

摩耶系 振別菟原郡畑村山上ふあり 佛母山初利天上寺と号し

當山の系創る天武天皇の御宇ふ支那法道仙々素朝して摩耶夫人の像

を作し伽藍を建営以山上絶系にして蒼海遠小眺をを勝是より

今日會日とて近隣群とふ又河馬の無難を祈ふとて馬を退ひて詣り土座

に昆布調へ帰る是を摩耶昆布といふ

諸國

大坂



二月中酉日
洛西梅津邑
蒸講の圖



移りあつとせ

所表子別両社神位神樂あり日夜國郡の奉幣使代及社家
島へ渡り聖申日奉幣神樂あり今日日東畢り聖日より津浦
移り又を日より山くの口を洞を越え山人の出入を免れあはに洞東と云
十一月津東より山の口を洞より木を止むと云

○

猿の口洞

日所小松くを猿を引

同玉清の八儀の社司七日の洞後を猿く今日日清小松くを猿を引
引く是を猿の口洞と云ふは山は猿多し今日より猿を引くは
又十一月上申日洞の社司神事と云ふは又なる小松くを猿を引くは
の神事と云ふは後猿多しを引くは又なる小松くを猿を引くは

京師

中西

○梅津蒸講

城列葛野郡東梅津村小松之一村を七町小分ち一町

毎小頭屋を定免注繩を張生土神松尾神を引く神供三寸を備へ座
小大金を置く醴或ハ醴以沸く
茶以茶煮ナと云ふ老婆甚望を名く竹節とはさ金の前小まき是は何を
お蒸さふかぜを唱え六側よりいもやうと云ふと親ひて小児或ハ他郷
の者を捕へ抱さ金の上より二夜蒸作と成して後二夜蒸み松竹梅と飾て
島屋く醴或ハ醴を勧免帰くは是痘瘡麻疹を禁厭更りてその

行事二七

江戸

上丁

○釋奠

湯島聖堂に於て行つ

公事根源云 是年ふ二夜二月と八月と云ふ若日蝕國忌利年の象
なりぬあられ中の丁にありき 續日本紀云文武天皇大宝元年二月
丁巳始行つる光仁天皇宝龜六年右大臣吉備公礼典を稽考ふより
祭物始て修る礼容観べく是先聖先師を多う祀り十哲を祀る
奉朝統奠の式と享日未明五列小郊社令其属ハ及庶司を率く先
聖の神座を廟室の内中楹の間小設く先師顔子於首座く関子騫
より冉有まで公孫之四座く文宣王の東小設く西を上座と云ふ事路より

ふ夏までの五座を文宣王の西に設け東に上座とし併に十一座何れも
南に向ふ其牲を六衛府よりこれを進む陳設の品々執事の負教未延喜式
に詳く其旧地京師神泉苑の西にあり此祭奠
今東都に於てこれを修む

月令 社日 月令云二月の節元日を擇んて民を令して社を云調春更興を
社稷を祀農事始祈る元日春分祭後述に成日を云

月令 彼岸 七ヶ月の同諸寺院に諸佛事修むを修り其中日を附正とすは正月
論の運仍赤道中一昼夜寒暄等く中和の候なりを以佛家これを佛徳小
表に波羅蜜多と云

月令 下旬 水に祭 農家水田の祭あり神代卷云天照太神喜で日は物に
顕見蒼生食を治むと云粟稗麦豆を以て陸田の種子と一稲

秋りて水田の種子と云農家彼岸の祭十日小穀を水に漬彼岸乃
後十日小取出一種を下に是を苗代と云六七日を修む苗代生る四月迄の
土用中吉日と撰む農民膏穀の種を水田に浸し稲穂など田の畦ふ三川稻

苗々水を得るれば故小苗代水を引の口を穿る以水口を云
萬葉 五十串立神酒座奉神主部之雲聚王蔭見者父父

月令 李御讀經 今絶く無一に次第云春秋二季百僧を南殿に集めて大般若
經を讀む其内御前僧に口を定く御殿に於て仁王經を讀む納言冬議

名二人南殿に著るを云を行ふ

月令 朔日 實如上人忌 明日日山科西奉教寺淨坊に於てこれを勤む上人を
奉教寺九代目の門主ありて蓮如上人の子なり大永五年乙酉二月二日遷化

春秋六十八歳 周云大明の唐仲和といふ者實如上人の徳行を傳へ即自竹と画
奉贈日本山科實如老上人

上人徳行是問何一箇禪門大丈夫心裏要容天外善此生渾似竹中虚
大明正徳八年五月 杭州鐵冠道人唐仲和

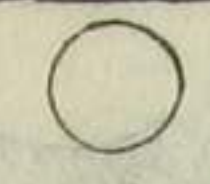
月令 天王寺六時堂修正會 今日酉の刻より翌二日小至内衆僧
六時堂に於て法更執行樂人音樂を勤む

月令 吉野餅配 和州吉野藏王権現堂前ふ於てこれを勤む寺を金

孝山寺山を國軸山とて威耳根山とて日本七高山の其一つなり
里俗は山を金御嶽とてよぶなり
神社考云從小角始め當山修行の時神釋迦如來の容を現し
行者曰は帝親と末世惡趣の衆生を度し難しとて次は弥勒の容と
現む行者曰未あり次は藏王忿怒の形相を現し其狀甚怖
及て行者曰是我が邦の能化なりとて其像を損して去る
とて帝長二丈六尺とて今日華供懺法の西行人
及て神人奉堂へ出御供神酒を備へ幣帛捧げ祈禱あり其外満
山の堂社へも残り御供神酒餅等をなれ其後藏王堂の廢座
夥しく餅をなれと系傳の人小施し又は餅を下使の家婦曲家
入頭載とて古登中の院へ移し藏王是を解せんと
解配とも云古例は餅を搗り西成郡淡村源光寺より鏡餅を日圓位
有郡平野大慈佛寺の年一佛十菩薩の画像小供
を來の首若登王の神人平野大慈佛寺より鏡餅を日圓位
法は時大慈佛寺より其鏡餅を末廣廟を中より二米を解く
聖の神人小施とて神人は是を解て若登小寺王再び藏王權現子守勝
子は神人又修となりて後是を破碎きて多くの衆の中へ更吹く

行事二九

再び解く今日の日記解とて毎年二月子守勝の神
半小平野大慈佛寺より來く神は勸是又春秋彼岸の時
興ふは時若登より來く大念佛上人小供なり是をを即と稱是是皆融通
念佛の完結なり



二月堂修法

和列南都東大寺にあり今日より十四日迄二十七日の間

これを行ふ年々觀世音の像大小二軀あり今日より七日あひ上七日
と云大像觀音の宝蓋より八日より十四日小像を七日と云小像
觀音の宝蓋より七日を修す所東大寺の傍侶今日より十四日まで
あつ是を修す人年々小像より多あり里俗云傍衆多とて一豊くと云
又系傳の男女石額あり者日く佛を修し通夜を七日の夜十四日の夜
とも小水屋の井一名若登井の水を汲み浄水盥ふ年々中供ある所の
園伽水とて且は水汲りて牛王を押しは井より二月堂の堂下猪の宮の
限り水汲りて之井の上小舎を壊すは是古東大寺實忠若狭國
連を園伽と封しては兩夜の外小供なり是は是古東大寺實忠若狭國
連敷明神の靈感水汲み水汲得る例なり元亨釋書云實忠一日

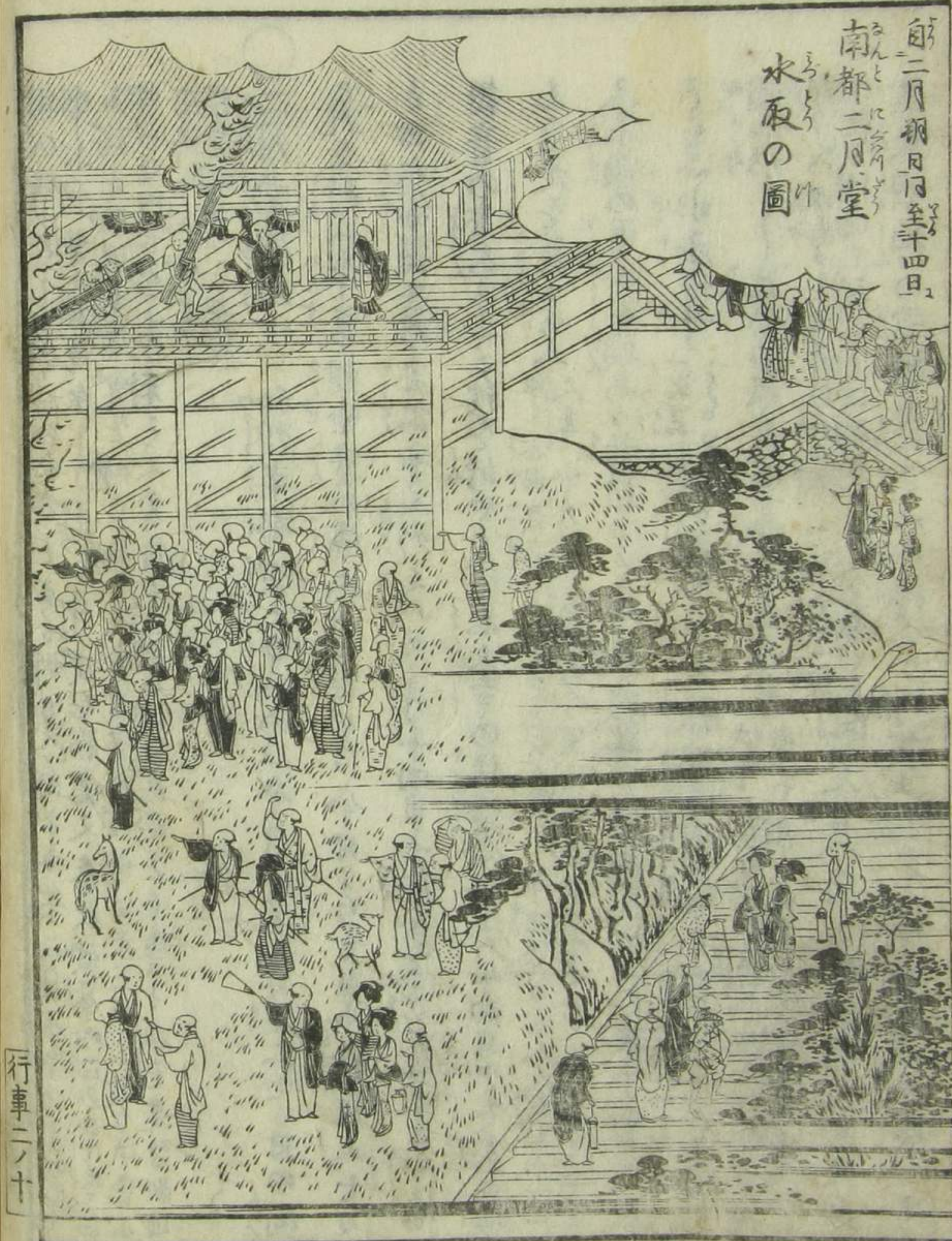


水取や
こりりけの
履乃き

いせ

ヨシタ

行車二十



節二月朔日乃至十四日
南都二月堂
水取の圖

南都七大寺の其一なり西の系より造り花散瓶を献じて堂内小飾る
依る是を花の會と云

○

佛光寺餅撒 伊賀國山田郡千戸村あり堂内より千の餅と
され諸人小施さば餅と拾ひ得るその福ありとて諸人夥しく餅と拾ひ

は餅の中に錢を隠す餅三つあり是小當ふのいふ福を得云

○

鬼押の神事 伊勢國鈴鹿郡津惠日山觀音寺小施くこれを以て
未始修心會の法事ありは時當番の氏子青竹と持くエイクヤウツ

寺内小馳入る系詣群集して曰くエイクエイクと大聲よく二夜鳴り付
きあり次より牛王頂戴の儀式を執り神名帳と讀む供物小鶴の子

あり後より鬼小押しあり伊勢二座の内勝田吉支あり能三番あり是
と伊勢の神樂と云能早く鬼押の神事あり是當寺の奉るえぬ天皇

和朔二年乙酉二月二日安濃津の浦より漁夫の網より出て出現のとい
え鬼来り像と奪んとて一以退拂ひ一例なりと云

行車二ノ十二

ヨシタ

京師

諸國

二日

○藤森祈年祭 山城國紀伊郡深草里あり申子神供

○

住吉祈年穀祭 攝津國住の江あり五穀豐熟の祈り

○

同埴使 此日より神人大和國香久山の龜畝火山口神社の山上より

埴を取今日位者小歸ふ畝火山と幸島山の上れありて八本村の南一里あり里俗
皇后と日本紀云神武天皇天香久山の埴土を取八十平瓮を自ら造り

おりはしる諸の神をあり天下に謚させぬ其土を取所と埴安と云

二月朔日
振津
住吉植住
發遣



行事二十云

佐吉此
さふけうい
うへ
よめ
まみえの
あか
ちうみ
さふ使
うねひの
ふにいそき
たふ



八樓
養濟



ヨシダ

三日

知恩寺百萬遍數珠拜見

洛東にあり世に百萬遍と云ふ

淨土宗四箇卒寺の其一より此數珠と後醍醐天皇元弘元年天下疫死
する者夥し帝これを深く哀憐たすひに當寺八世善阿上人に勅し
持念せしむ上人一七日を限りに唱念佛を度二百萬遍時小疫病消除して
衆民慈眉を開くこと成りたり帝大に感感しり百萬遍の歸を賜ひ
且弘法大師の真舍利の眞名號を賜ふと後法を授けり時とて名號
弘法大師の幸さるる結尾十人一千八十顆の大數珠を授けり
百散せられ百萬遍を得るとあり

四日

箕面二富

朔日より今日まで修三會の法あり

官家より奉書と賜ふ例あり
夏は正月七日の案下に記し

四年

祈年祭

祈年の豊年求むるより天武天皇白鳳四年二月

甲申小婦の神祇式云二月四日祈年祭の神主二百二十二座の内神祇官の
神七百二十七座 案上 國司の祭神二百九十五座を公事根源と是の
太神宮以下二百二十二座の神を中へせり其祈のたよりありと云ふ

もあつ國々小もの幣はあつ諸國も年々ひきつりたり之神祇
官より行われ難ひより洛東のめり物に備へりその白猪白鷄を乃
物と云ふ天武天皇に年二月より此祭あり大か祈年の祭月次西
夜新嘗祭をば四箇の案とて國の大事と云ふなり 又祈年穀奉幣の
二月七月二たびありし日とて事所廿二社と
廣瀨 熱田 住吉 日吉 梅宮 若宮
廣田 祇園 北野 丹生 貴布祢
日吉 宰相其外と皆四位五位のほひなり廿二社とて宣令あり伊勢と花園
の帝賀茂松尾の紅梅其外と云ふ美なる紙々書と云ふ
書と云ふと云ふて云ふの云ふは云ふと云ふと云ふ
賢阿

○ 清盛忌 洛東六波羅密寺小形に執行あり倭に堂内水の旁小安室に
清盛と刑部卿平忠盛がなり 一説に白河院の御子と云ふ 安藝守小任に保元の軍功
により播磨守小任に平治の乱に源義朝を亡くして獨武家の棟梁と云ふ

大坂

二十餘國を押領して官位屢進と大政大臣位一位小叙を女徳子と稱し院弒もつて
高倉院の中宮と安徳帝の外祖より奉朝の武臣四海を管領するの威權清盛
小至る始て盛なり已に意小懈る者や法皇自の言とてこれを懐くは或は押
或る遠流を其母の皇子大臣月卿これに小弒等と驚る者ありは後入道して淳海
とて養和元年二月四日薨る行年六十四
因之當寺奉る始に地蔵尊より空也上人再興ありは後親王を安んじ又太平
寺所ねるの地蔵堂の修を命じとて寺なりと按むるは地蔵堂今建仁
寺なりを以て堂の奉るよりとて執事ありて空也上人の再興なり

京師

五日

洛東東福寺五大堂小修火難除の神事を以て是等の文字方々の
法住持平公(後中)附屬よりありとを以て是等の文字方々の
夜を除くといふは板門の工難なりとこれに就ては日家より事を記す

京師

六日

仲哀天皇國忌 八幡小修と稱之 帝の皇子十五代ありて年數小
小堀遠州忌 洛東大徳寺増頭孤蓮菴勸之 建仁寺改一系通の終焉あり
天王寺太子堂修二會 今日西の外樂人音樂を勸む

大坂

諸國

○

住吉御唐煎 振列 羽日神人和列畝火山の垣を取其土を以て四日小平

○

禰年祭 伊勢内宮小修と奉幣あり案の時令順度ありて以て

るに祈るあり朝使至るの日大神宮司使者を引く外宮内宮小幣帛を
献ふ別宮振社も小献する是は朝廷神祇官の領するなり

京師

七日

○ 梶井宮二月堂行法 洛北大原にあり
○ 建仁寺護持出 洛東あり

諸國

○

新能 今日より十四日止 和列南都興福寺南大門にて勸之

或説云興福寺二月の法會夜陰ふれ寺僧春寒を感じて門前より
薪を燒其光よりけし俳優をかり長夜の戯れと云又昔西金堂の

修二月會ち弘仁十二年より始り東金堂廿八相の花西金堂二十二相れ
花合せ六十種の番華以飾り擁護の祖神権實の諸佛を勸請して

供養せし清和天皇貞觀十年大風萬樹を伐雷山崩落一地を穿ち

修小西金堂の前小穴ひくく其末南大門の芝小拔此穴より魔風吹て諸
堂諸殿の瓦門扉を吹揚て散れを剛雲收り風止後まねをやく日天小僧
星出天子の愁四海小賊起て我國の正法盡かんや虚空小僧より大衆
僉議區々小して是を法會のむね外せしめて絶る法起し西金堂の法會と
南大門へ移して行方是風穴の末小洞をす所ありは會々昔より
より陽とて晝夜をくく人々の薪を焼て昔唐人より西金堂の場小く
此薪の光小踊舞えけるやあん其前後小松院明徳の頃を二月會の宵小
くく一七日南大門の於て猿樂試あしむ其頃より上陽の薪の修成を無
火とて手水屋の内より猿樂の猿を施とて小薪の能くく
は役々金春親せ保生金剛の口座を業にして今に座共小東武小僧一毎二座
宛去年十一月神宗の御より南都小あくるを勤む今日よりあはれ役者より
小勤む八日も小あはれの御より九月に至るは初時の一座衆徒小あくる役者
本より勤む其日の門徒も次座の役者も勤む十日も亦次座の役者
茲より於て官給終りく十一月より十二月小あくる座相傳へく門徒と
はとむく雨より勤む猿樂あしむ其時より衆徒の檢校猿樂を勤むあり
常を芝生のより後雨氣を試しはくも雨あつて紙温くしたハ
猿樂試罷む七日の雨雨降る時十四日降る時これと勤む猿樂を芝生の樂屋と

行事二十十七

大坂

諸國

八日

○推寺修二會

○二月堂水取大續松

更々朝日の衆下にゆり

○攝津國島上郡原村天王奈

原五ヶ村の生土神ありて牛頭天王をなす

南大門の希良の隅あり今春を芝の樂屋と東西なり真福寺の貫首衆徒
等の見物と南大門の邊より小機後を構へ其杉松小僧の衆徒の見物ハ猿樂
と号して高サ一丈許隙のてく隙と木下に
棚を構へ各これ小腰をくけて見物するなり
但し親世をまき今に役を勤む
社あふ繩をよりく大なる蛇形をゆる松の本二本をまき是小流り一
其上小方一同の的を上げ是を蛇の目小表し神系頭家の者上下張着し
川向ひより第二子と携へ的張るひ甲の矢を射乙矢を射るは相圖小今村
二ツ小別と彼蛇形を頭と上組口箇村
上衆村 本衆村 中村 西衆村 西衆村 西衆村 西衆村
を下組一箇村 下衆村 下衆村 下衆村 下衆村 下衆村 下衆村 下衆村
の者蛇形の尾を曳く山下に到んと川を同く互小曳合
更々曳のてく終小蛇形を曳断る左右へ分ち
下組と二村より傳云性昔は川の
例小惡蛇住し張退治せし遺風ありと我
洛東祇園御八講 今絶て盡し御八講ハ勅會より行つ法華經の宿誓かん

故京



釋迦堂遺教經會

又訓讀會云 上京五辻中にある瑞應山大

報恩寺 又千手釈迦堂より 真言新義洛東智積院の別院なり 依り智積院の僧

衆これを勸む此經を釋尊入滅の時佛弟子に爲す遺教の經なり 故に遺教經と云 訓讀會と云此經を訓讀を所の謂なり 寺の用明

天皇の沛宇小茶割して後猫田中納言光隆卿は所小傳せりより

今の奉堂と奥列の藤原秀衡建營して如珠上人を請も是處の

中無なり 秀衡上洛の時車の轎今あるに寺内小あり 諸小遺教經小あり

寺記云 等持院殿尊氏降府命 命本寺令行涅槃

槃講云云 親長卿記云 明應四年二月十三日 千本釋迦

堂遺教經聽聞云云 洛北貴布禰社五穀系 賀茂の神人糸向して神供奉幣の儀式あり

祭神二座高麗奥の御系と閻魔此御神と倭特諾尊火の神迦具美

智を斬る三段と云 其二段高麗と云 即是貴船の御神なり 高麗

と閻魔と云 龍神なり 雨を祈り雨を止る小は神と云 附と靈應若

大通寺遺教經 洛南東寺の 其外諸寺少く和之

泉涌寺舍利因恨 今日より十八日迄 二重の金塔小安を佛牙の舍利

と云 佛涅槃に入の時羅刹足疾鬼を以て伺ひ佛牙を採奪ひて一紙

韋駄天降伏を加へ取止る 晝夜恭敬して身を放さず 佛滅後一千六百

餘年と歷る大唐白蓮寺通宣律師戒香薰修の威德冥感小通一韋駄

天形を現しぬい三歸八戒を受其報恩として此舍利を通宣小授り

いもう人同傳り白蓮寺の寶函秘にたりしが泉涌寺中興祖後仍

律師の末弟湛海禪師の入束せし芳跡を慕ひて彼土小渡り白蓮寺小詣り

舍利を拜し仰信の修り竊る古老の頌德伝ふるに惡き人とのても佛舍

利の利生他小異りて官家の崇敬厚く守護嚴守ある故將來の至

江戸

諸國

京師

京師

故吏

達世空しく奉給ふ帰付とて下も志が猶止まらず再び入宋の計と云ひ
二階の樓門三重の塔婆を構へて船を以て隠軍に列し先白蓮寺の修造不日
して成る大衆其深志を感へて通ふ佛舍利を附屬せり湛海秋夜の波と
押へ佛牙と持して帰帆の纜を解き帰舟して當寺小収むと云々

○第六天神祭 浅州津彦前ふあり祭神天神第六面皇根の二尊りり

○神軍 佐渡國康伏小別家今夜風雨烈しく明日ふより快晴と云々
神軍より其跡小矢の根石多く落敷る有里佐これを拾ひて守とん

十日 ○賀茂氏人饗應 氏人東西の両家小別り今昭目
東西上頭があらは氏人饗應と云々

○北山鹿苑院天神祭 鹿苑院の南田圃の社人よりて的を射ふ
中より小祠あり

○五條天神恩頼祭 天使社又掛宮と号し祭神少彦名命 神傳節分の
祭下にある

十日 ○大原懺法

○列見 今毎一公吏根源之上卿辨外記史と云々あつて太政官まで六位
己下の藝能あるもの派えしく式部兵部二省より率いてまいらるるを

行事二二

諸國

十三日 ○菟原住吉祭 摂津國菟原郡住吉村あり

○氷上祭 周防國吉敷郡高原氷上山あり山を比叡山を摸り靈
地より一子修載年海小今夜星降るのつとて是より北原聖の象より
て世運の象より天文八年より星も降るのつとて大内義隆の代より星
絶る今に至りて象供土中に埋さる土石と云々と云々石解る土饅頭と云
理人これを得る紙を天行病と
防に瘡疾が載の樹厭と云々不驗有

○二月堂大松明水取 丑刻より寅刻まで更替朝日の象下に記次
今日諸寺院小松明燈懸會修行 燈懸像紙掛ふ

○今日諸寺院小松明燈懸會修行 燈懸像紙掛ふ

○天竺迦維衛國淨飯王の妃摩耶夫人一夜金人天降ふと云々孕と云々
四月八日を降誕と云々周昭王二十 悉達多と名づく衆十九ありて檀特
山小入證道を修むと云々十二年二十衆の冬臘月八日曉成道と云々

嘗て母夫人の爲に一夏九旬の間切利天小上りて法を説き又一切衆生の
爲小無上の法を宣説しつゝ四十九年法衆七十九二月十五日
五代鸛鶴草普不令 沙羅叢樹の下より大涅槃に入りの釋迦牟尼佛と云
入滅の跡を画と今日寺院小掛ふ今俗家に懸解豆等と教大物と云
東福寺涅槃像 縦八間 北典司筆 服小應永戊子十五年六月書行年
五十七歳多くは像相好殊勝ありて世小名高し北典司と大進和爲を
派子ありて諱を明兆字吉山と号し天性佛画妙と傳ふる當時稻荷
明神の靈告あり彩色の具と後より得ると云は外日等の五百羅漢
二十八宿親音應身の像二十三幅等あり皆絶世の奇品なり
今日都下の貴賤遊客群衆は
是と稱し始めと云宗匠の方言なり
今日諸寺小掛ふ所の涅槃像の中名画と稱するもの佛光寺新坊の像
唐帝涅槃像 西の岡長法寺の像 唐筆十六日 京極通廬山寺の像 墨茶等佛と
聖王如來と云る非なり一老嫗寂んで佛足小像を藏し又今日二條通本堂町
黒色と云ふものなりと釈迦像を引くは像を能くと云

善導寺小掛る所の三十二相の親音十六羅漢の像最奇観る其好寺
院小安と云ふ所の名画多く藝よりつと略之 江戸大坂及び法王
大雲院涅槃會 京極通に糸の南小あり 已に釋迦佛像 惠心作
輿小糸世衆僧香華に捧げ行樂を奏して本堂より羅漢堂小迂り
樂法事あり月中舍利會を修し申刻釈尊の像と本堂小還座あり
め 法支音樂あり岡山貞安上人よりことと勸む 上人の傳は十六日の
浄福寺涅槃會 一條千平の東よりあり 今日來迎會を修す 俗小遊供
報恩寺舍利開帳 小川通の西上立賣の北小あり 此舍利は始々室町
女院の持ちたり女院興正菩薩 兼室山津任寺 中興開基しを御歸依ありくは小
より是を寄附しつゝぬは終是を我を兼室の淨住寺小安と云ふ
後故ありく尚寺小納む 女院自筆の寄進狀ありふ
今日諸寺院小終る舍利會開扉あり 眞言菩薩舍利記本今地寺有
梅尾四座講式 高山寺と号し 洛小梅ヶ畑小あり 明惠上人中興開基あり



二月十五日
嵯峨
釋迦堂
柱炬火の
圖

○嵯峨柱炬

清凉寺釋迦堂前小松大續松三基を建て

暮小乃び火を焚く各續松を繞り弥勒院跡を唱ふ是西域小松

釋尊の遺骸成茶毘す遺意なりと云

其式新迦堂の前に同許の大炬を三ヶ所小松を三ヶ所を建て
桑村系の續松なるが故に桑村系といふ
大門中門内門の三門あり
新在家村小松村觀音寺村の百餘戸あり
向連堂あり
是大門中門の儀あり又幸堂の方小松を三ヶ所を建て
其内の魁首なる者一人鳥帽を素襖を着て炬火の圓小松を三ヶ所を建て
は條多の者火を燈す素襖を着て炬火の圓小松を三ヶ所を建て
等しく炬火の圓小松を三ヶ所を建て
一夜小松を三ヶ所を建て
殿人乃り付魁首一人乃と被とてあり炬火の圓小松を三ヶ所を建て
和後を後圓に見おを巡り群衆して堂上或は茶店諸堂の軒端より
極麻のてく通合より炬火の半燈より附燈より炬火の圓小松を三ヶ所を建て
山崎寶寺本尊觀世音 聖武天皇 行基弘法慈惠の像等開帳
西行法師忌 兼好法師忌 各其旧地より移りて續松を三ヶ所を建て

江戸

大坂

諸國

○増上寺涅槃會

其外に戸寺院各勤之

○天王寺六時堂涅槃會

舞樂あり

○多田院祭

摂津國河邊郡多田庄鷹尾山法華三昧寺と云當院の

源家の宗廟ありて満仲頼光頼信頼義義家等をまつ

満仲公記文云 吾没後留置神於此廟窟可護弓箭家加之

當院鳴動兼而應知見四海安危也亦云源家之安危者

○可依當院之盛衰云々

満仲在判

○南都興福寺常樂會

東金堂小間浮檀金の釋迦佛の像あり

厨子小安ひ其扉小涅槃像以画く相傳ふ巨勢金剛筆なりと云今用

其扉を開く 涅槃を梵語なり記して滅度と云又常樂我淨を涅槃の四徳

鹿走 南都春日社の廻廊にて後樂のを文年頃の役人等と云

彦山権現祭 豊前豊後筑前之三國小幡根せり人山あり十の宮四

九の靈岨あり二岳鼎のてく岨より祭神北岳と天孫穗耳尊南岳と

二月十六日
四條川原
積塔の
園



ヨシダ

附言
三喜の同紙をりて扇ある奴ふん
との形と造る風小競りてをり
揚ふ多々紙書とる小国東てを
多おと云張久意造まうや
又韓信敵陣の遠近はそんがふ小
造るおとも
或云幼児と内子陽熱さるるが故
ま陽の時其氣益々過る故小紙
若紙やふふと見童小口を
用いぬ内熱を洩れ一休



行事二ノ九五

父母小後は姨母小養より成長を其性敏悟英邁よりして塵を出入
志あり十一歳の時日本小田原の大蓮寺小遊く薙髪一見参上人小庵
して一宗の秘蹟を傳へ天正四年佐渡國より大安寺と同一後近江國
小至は織田信長公同玉蒲生郡中村小西光寺と建く昨と居くむ
同七年六月安土淨慈院小遊く日蓮義と宗論の交ありて竟小被凌
を伏し是は安土論と云其交結書小出されこれを畧し後京師淨教寺小
移く專修の一行を勤む時の人際を呼で小釈迦と号し同十八年伏
見小称念寺と同一天正十年六月二日織田信長公父子明智光
秀が為小殺せし内之際二君の冥福の爲小息信忠公自殺の地小
佛閣を建営し大雲院と號し其地二宗の南無丸の西陽光院の故地所
山と名づく同十八年六月豊臣秀吉公の令によりて寺と今の地小
移し近江國井備後吉栗聖堂と助殉死を尚度小墓あり元和元年七月
十七日寂し行年七十有七

京師

大坂

十八日

大悲山峰定寺觀音會

鞍馬の小五里許別不材小あり山勢

高峻よりて幽邃閑寂の地あり

幸堂梁の銘小云平清盛奉りて縁起を

十九日

貝寄の風

天王寺公人六時堂の前より日知を云幸

行ひ住者の浦（即君子と取れり）是来る廿二日聖靈會の曼珠華小け
貝を付く舞臺の隅小まき舞樂を奏するなり其貝の形櫻の花小
似たり是を筒花小付るは貝今日浦小雲房へ龍神より太子（持）とて

諸國

二十日

淡間祭

駿河國安部郡府中にある

新宮淡間神社より代々

將軍家より修造せし祭神本花咲耶姫

相殿天津彦火瓊杵尊

今日の祭禮厳重小して舞樂あり

建徳寺坊中勤之

府中惣所より狂言遊物を出し

近郷の者をも買者多し

京師

廿一日

光明峯寺殿下道家公忌

洛東東福寺にて修行

公九條家の紐月輪殿下兼実公の孫より後堀河帝所より人なり

江戸

兩本願寺太子會

東申ノ刻 廿二日辰ノ刻
西未ノ刻 廿二日巳ノ刻

廿二日

賀茂松下家に於て後鳥羽院御忌

隔年小あり 子寅辰午申戌年勤之

京師

太秦廣隆寺太子會

六角堂蓮臺寺下寺町太子堂其外

諸寺院

於てを子會次修之

大坂

天王寺聖靈會

今日辰上刻六時堂小修之修行あり

大坂

後三綱寶藏小仕

佛舍利太子の像を兩輿小運して六時堂小

修之幸ある行列獅子菩薩次小樂人次は寺僧次は掃部次は三綱

次は公人市典を昇る次は舍利あり行列の間音樂祝詞後育

兩輿を内陣小安置しあり衆僧各着座あり次は寺僧衆僧

小僧衆僧あり次は登高座四箇の法用散華ありは時衆僧次は

道次は手水等の作法あり三綱を清む次は舞樂式畢て

西別還幸行行列始のて寺の法會年中教多ありと之

今日を以て第一といは日筒花を舞臺の四隅小建ふ昔は法

會廿一日より廿三日まで行はる百廿番の舞樂として經營あり

毎月小儀王一ヶ年小絶當せし元亨釋書云聖德太子ハ用明

天皇弟一の皇子なり母后穴穂部女後小金色の比丘來て我小救

世の願あり后の胎小託せん后問て誰あるや對云我は是救世菩薩

家と西方小ありと云早て口中小入法覺て後妊身とあり八月小及

で胎中ハ言声外ハ聞ゆ敏達天皇二年癸巳二月朔日后胎小遊ぶ

時小隱んる皇子降誕ゆすれ因る厥戸皇子と號せ時小黃光

宮中と照れ人皆奇まんとす更ふ一岡六年冬十月百濟國より佛

經論以貢を子奏して披閱せんと欲て天皇驚て問ゆ對云昔

經論以貢を子奏して披閱せんと欲て天皇驚て問ゆ對云昔

經論以貢を子奏して披閱せんと欲て天皇驚て問ゆ對云昔

經論以貢を子奏して披閱せんと欲て天皇驚て問ゆ對云昔

經論以貢を子奏して披閱せんと欲て天皇驚て問ゆ對云昔

經論以貢を子奏して披閱せんと欲て天皇驚て問ゆ對云昔



法隆寺會式

○舍利寺太子會

終日、紙束の上下を
繰返して、葉を出し、
糸を

和列平群郡にあり

九四

○德正寺蓮如上人傳記
今日申刻
明日巳刻
富士寺四家のものあり

行事二九

○深州西岸寺月上人傳記
○長福寺月林和尚忌

長福寺月林和尚忌

洛西梅津小あり 今明日宝物出あけ店 平列へいりつもう

○ 江列比良八講 今垂一古昔此處皆山門の領内之は日叡岳より衆僧

来りて神前坐八境と勅む
 自是太昭神の夏を八月五日の条下に祀る
 は時開水の風波荒く多く通船をくむ

北野菜種御供
菅公と糸持公と延喜二年二月廿八日

廿五日 ○ 北野菜種御供

太宰府小松と薨一のふ今日涕忌日あり

今夜西の京侍付団を領分家より大小の侍付小聖の社小献を宮司の老幼お命にかゝりて幣殿より神前階下に参りて御前より傳へ宮司の一編巫子文子とどのく並小それと殿に神前にて是を和佐と云ふて膳供とも稱し菜種の侍供と稱して其子供の上は黄菜花をさんぬ小娘より年よりて菜の花の句に同うする時を梅の花城ささき見んとて下のあま上のあまの惣集夥し西の京神佐所あそ調へて是成より梅小入まで婦女ホ乳りてさき急激の中を押強く通る幸同くさるるさるるし

若祥院八講 今每一若祥院を東寺西南八町許菱家の成寺天祚の祖父法公建立のまなり

○ 吉祥院八講

今也一
吾神院を東寺西摩八門
成寺天神の祖父法公建立のあり

○ 麴カビ 天 神 泰

清自画の尊新用康

道明寺系

河内國志紀郡土作村あり今日亦自地文満之

桃山遊宴の圖



行事ノ三十

六百萬合
いふの
入目
のころ
本乃
三月の
春



大申オホモウ一ヒト夜ヨ小コ寺テラ製セイ作サク世ヨ荒アラ本ホンの幸サイ尊ズン十一面觀音寺額百七十

比丘尾寺なり推古天皇清寧聖徳太子の開基土師連

土師里々寺と建校々土師寺とも云五部の大系経を境内に

くり本榎樹生を
 其を以て掃く
 急務とてさうへ
 中興の経職学壽尼の管示是

菟丞相の伯母なり公左遷の時當寺に來て終夜別を惜し
 けいめいふま
 こん
 せい

四方の鶏鳴^{いそ}喧^ね——時ふ菱公和奇を誅^{あつ}トウ

とや男を妻とすゝむのさへお星の曉りゆ舟
今小唄うて

中^{あめの}天^{はびの}穗^{こと}日^ま令^つと^{てん}あ^まる^な天^{うん}曆^ま年^の中^の菅^{すけ}靈^のを^り如^り形^り不^り祀^りつ^りと^りと^り

社派建^{そへ}てこれと参^{まゐ}ふは日^ひ祭^{まつり}礼^{れい}の義^ぎあり奥^{おく}の天神^{てんじん}も同^{どう}日^{にち}

體を道昭寺系とく

府天神桑
菅公左近の地あり
寺紀及び國
画ホニ編又出

二月二日女児が飾弄ふところ後の雛人形紙遊び

行車三州一

て
道奥遠子人形の影を商人糸師と四糸五糸の糸

橋尾張町一丁目十軒店麴町四町目大坂之清堂前形參町

と燈燭を糝く光氣羅綺彩粉小映く行人の目と奪ふるる小

来ふあり還るありと拍ありぬ防あり菊福の楳嶺とて海

と讀人々
寺邊
小
林
分
別
本
泉
門
南
主
介

名千と四郎と云葉道ふを寄道陳必渡ひく名紙ゆえ
なぢん よばう よばう あふ な え

家易又抛筌ちうせん并ひととをを圖秀吉公のちゆうしきこう勅ちくを得え後小徳言ごんとくごんの事

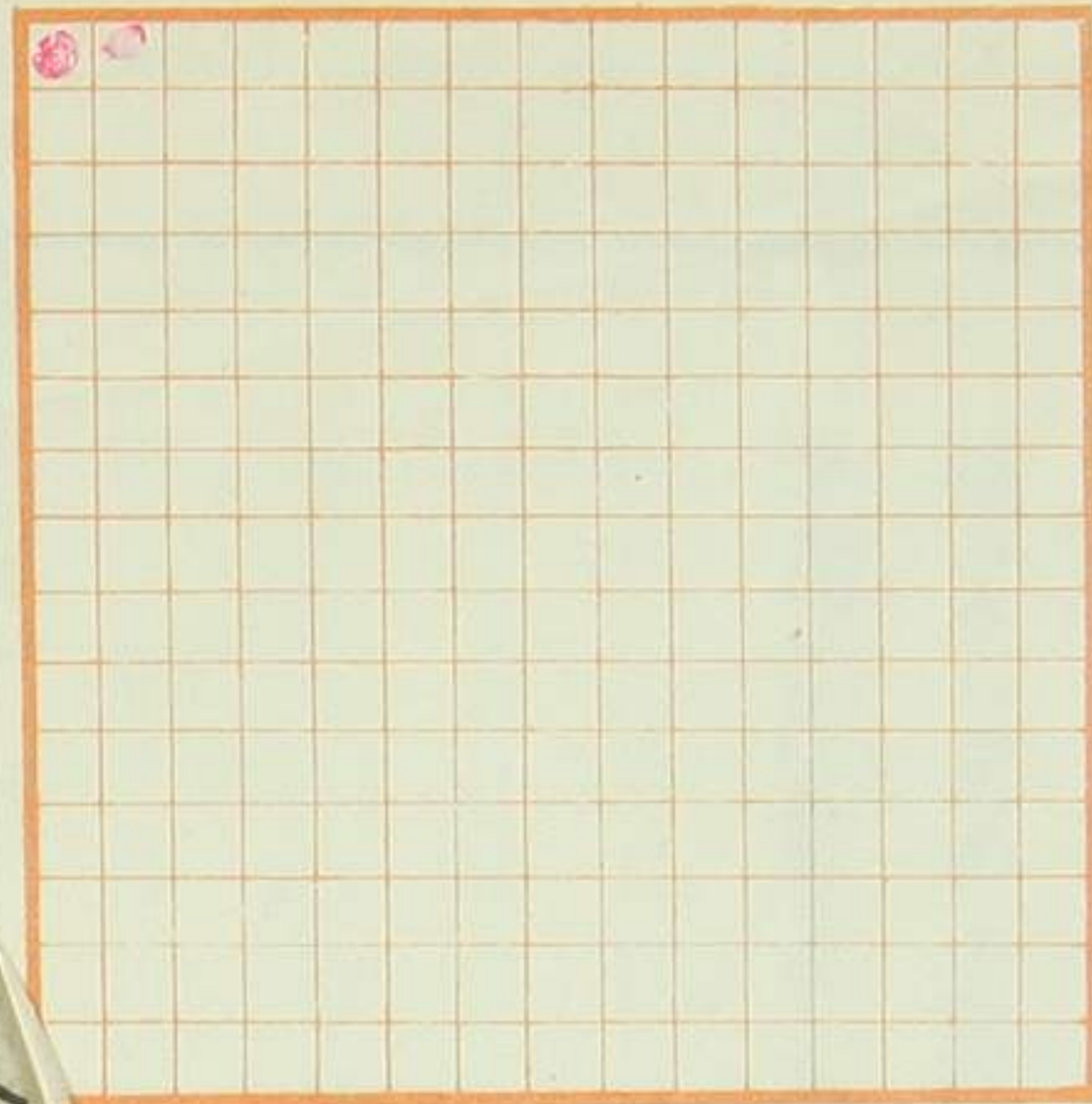
○上賀茂正念寺 舊紅梅
い寺と寔寺と云

佛法昨暫く夏井經一此梅を愛して初奇孤獨凡

こゝ 梅はつづなる夢宿と憐れまゝと人より折ふて我より
そゞろと

里俗之風

4年 9月



彼岸橋

○系本國寺日妙覺寺

絲橋

○系津室河殿内

難人屋中

○上系蓮基寺

○大坂陸専寺

本橋の絲橋と唐山

○智恩院波女橋

同院の附家いすむきと茶と齒と和治はれを以て老婆の齒と云ふ

桃花

下句

○伏見桃山

○系聚落桃園

○本國寺境内

○大坂高原 日下寺町

○泉別父鬼村

○河別若江那稻田

唐山は橋を以て桃を以て其色を以て云ふ也
李廣傳も桃李不言下自成蹊と云ふも春色の森

訪國年中行事大成卷之一 終

行事ニツ州二

彼岸樓

○系本國寺日妙覺寺

絲樓

○系津室津殿内

難人屋中ハ

○上系蓮基寺

○大坂隆專寺

本館の絲樓を唐山よ
新絲樓蒙とりハ此之

○智恵院波女樓

同院の時葉ハ此ハ生々ハ系と苗と
和治ハ此を以て老葉の苗と云ふ

桃花

下旬

○伏見桃山

○系聚落桃園

○本國寺境内

○大坂高原 日下寺町

○泉別父鬼村

○河別若江那稻田

其條取くみ多し唐ハハハ梅花覺く桃花を以て春色第一と云ふ也
依書ハ見也史記李廣傳ハ桃李不言下自成蹊と云ハも春色の森
と謂ふ宜なりと云

諸國中行事大成卷之一 終

